

## 公共図書館利用者の利用行動 Public Library User Behavior in Tokyo

田 村 俊 作  
*Shunsaku Tamura*

上 田 修 一  
*Shuichi Ueda*

### *Résumé*

The aim of the present study is to categorize the behavior of adult clientele of public libraries. The following hypothetical model was used; the public library user behavior is a function of user demands, the demands are functions of user needs, and the needs are functions of individual characteristics and attitudes. The user behavior was measured by the following five factors; arrival time and leaving time from the library, staying period, and types and subjects of the materials used by them.

A user survey was carried out at four public libraries in Tokyo Metropolitan District in June, 1980. The data collected from the survey were analyzed by means of the cross tabulation and Hayashi's Quantification Scaling Type 3.

From the results of the survey, users are divided in two groups:

- (1) Group 1 users, characterized by the heavier use of circulations, occupy about 36% of the total users. They arrive at and leave from the library at any time of the day, and their staying periods are very short. They borrow mainly books, and have interest in house-keeping, fiction, history, etc.
- (2) Most of Group 2 users arrive in the morning and leave in the afternoon or evening. Their staying periods are relatively long. Group 2 users can be subdivided into the following 3 groups; the purpose of the first user sub-group is to research or study, the second is to browse newspapers and/or magazines, and the third uses nothing. The first sub-group is the largest in size, occupying about 30 % of total users, and uses mainly books for their research. The second occupies almost 10 % of total users, and the third only 4 %.

---

田村俊作：慶應義塾大学文学部図書館・情報学科助手

Shunsaku Tamura, Teaching Assistant, School of Library and Information Science, Keio University.

上田修一：慶應義塾大学文学部図書館・情報学科専任講師

Shuichi Ueda, Lecturer, School of Library and Information Science, Keio University.

## 公共図書館利用者の利用行動

- I. はじめに
- II. 調査方法
  - A. 使用データ
  - B. 分析項目
  - C. 分析方法
  - D. 作業仮説
- III. 調査結果
  - A. 利用目的の区分
  - B. 利用目的による利用行動の差違
  - C. 利用者の属性・環境と利用目的
  - D. 利用行動と利用者の属性・環境
  - E. 数量化第3類による利用行動の分析
- IV. 考 察
- V. おわりに

### I. はじめに

公共図書館が市民生活において果たす役割を考える際、どんな人々が利用しているのかという問いと共に、どのように使われているのか、すなわち、公共図書館における人びとの利用行動を解明することは重要である。しかし、この問題は、利用者像や市民の図書館観等の問題と比べて、従来論じられることが少かった。

Berelson は *Library's public* において、利用者と共に、利用行動に関しても包括的に分析を行っている。その主な結果を示すと、次のようなものである。

(i) 公共図書館の利用の中心は貸出である。貸出の2/3は小説が占め、ノンフィクションの貸出は少数のグループ、特に学生と高学歴の人々に集中している。

(ii) レファレンスの利用は若年層に多い。主題は社会科学・歴史・自然科学・工学・文学が多く、貸出と傾向が異なる。<sup>1)</sup>

1966年に、Maryland 州の公共図書館において Bundy が行った調査も、利用行動を質問している。それによると、

(i) 利用者は本の返却や、ある主題に関する資料や情報を得るためや、一般的な読書のために来館することが多く、

(ii) 彼らは個人的な読書や学校の勉強のために資料を利用していることが多く、仕事やクラブ活動を目的とするものは少い、

(iii) 直接書架に行って資料を探すことが多く、レ

ファレンス・ブックや目録類を使用するような組織的探索行動は少い、また

(iv) 利用資料は社会科学と歴史・地理が多く、次いで文学の順である、<sup>2)</sup> 等が明らかになっている。

Knight と Nourse は全国的規模の図書館資源の現状分析において、公共図書館の利用に関する調査を1967年に行っている。

彼等は公共図書館の利用が多様であり、決して貸出に限定されるものではないことを示している。すなわち、“特定の問題に関する情報を得る”が貸出に劣らず多く、“レファレンス・ブックの利用”、“子供の勉強の手伝い”、“憩いの場所として”等の回答率も高かった。<sup>3)</sup>

Newhouse と Alexander は Beverly-Hills Library をケースとした公共図書館の経済学的分析において、利用者調査と住民調査とを行っている。資料の利用に関しては、“効用”の観点から分析を加えているが、それによると、最も費用/効果の大きいのはミステリー、未就学児およびヤング・アダルト向けのフィクション、心理学、工芸・美術の本であった。中学生を含む成人を対象とした来館者調査では、余暇の読書と学校に関連した利用が目的の上位を占めた、<sup>4)</sup>という。

70年代においても、Knight と Nourse と同様の住民に対する公共図書館の利用を質問する調査がいくつか存在する。例えば、Gallup が1978年に行った全国的規模の調査では、図書の貸出、レファレンス資料の利用、新聞や雑誌の利用が利用の上位を占めた。<sup>5)</sup>

中でも注目すべきは、やはり Gallup が New Jersey の住民に対して行った調査である。グループ・ディスカッションにより得られた仮説を住民調査により検証するという方法を採用しているが、公共図書館の利用に関しては、次のような結果が得られた。

(i) 公共図書館の“平均的”利用者および専門職の人びとはレファレンス・サービスを良く利用する。

(ii) 利用目的はレファレンス・サービスの他に、資料の貸出や児童サービス等少数のものに集中している。

(iii) 利用したい主題は利用者・非利用者とも同一傾向で、趣味やベストセラーが多いが、頻繁な利用者ほど、クラブや団体活動以外の広範囲にわたるテーマに関する資料の利用を希望している。

さらに、利用の動機となっているのは公共図書館に対する意識でなく、ライフ・スタイル、すなわち習慣の有無であるとの重要な指摘もある。<sup>6)</sup>

他にも利用者を分析する際の手がかりとして、利用を論じているものはあるが、利用行動自身を対象としたものではない。

利用行動を分析することの意義は明白である。公共図書館が市民生活の中で果たす役割を理解するためには、“誰が、” “どのような目的で、” “どのように” 利用しているのかを知らなければならない。“誰が” 利用しているのか、すなわち利用者層を知っただけでは、その人びとにとって図書館の持つ意味を理解したことにはならない。図書館に対する期待、欲求水準の調査もまた、それらがサービス状況によって変化するものであってみれば、“どの様に使われているのか” をまず始めに知っていなければ、不十分なものとならざるを得ない。

Berelson や Gallup 等の少数の例を除いて、利用行動の分析は利用目的を調査するか、貸出の内容を分析する程度の簡単なものが多い。確かに、“動機” の分析や“利用効果” の分析まで含む利用行動の詳細な分析は困難であるし、貸出のように来館者と真の利用者が異なる場合の処理といった問題も存在する。しかし、わが国のように、この種の研究の蓄積が少ない場合には、まず来館者の来館目的と利用内容を分析し、両者の関連を考察することが、今後の利用行動研究の出発点となるものと考えられる。

わが国において、利用目的と利用内容との関連を分析したものの1つに、図書館問題研究会東京支部が東京都杉並区立図書館の登録者を対象に行った調査がある。そ

れによると、図書館利用には貸出と調査研究の2タイプが存在する。貸出は40～50代の女性で、高卒程度の学歴を持ち、主婦・無職が多く、登録してから日が浅く、図書館を良く利用し、読みたい本は借りの方が多く、利用内容は娯楽、実用知識の吸収である。調査研究は比較的小数であるが、年令60才以上の大卒の男性で、専門職・管理職・事務職が多く、利用年数は長いが利用頻度は少く、読みたい本は買って読むタイプである。<sup>7)</sup>

杉並調査は図書館利用と対応する需要層が2種類存在し、いわば、図書館像に2種類あることを示している点で、興味深いものがある。しかし、i) 調査対象地域が杉並区に限定されている、ii) 調査対象者が登録者に限定され、しかも学生を除外するなど、代表性に疑問がある、iii) クロス集計では“読書” と “調査・研究” の重なりは少いの、しばしば、両者を同一グループとみなしている、等の問題点が指摘でき、結局妥当性を検証するためには何等かの調査が必要であると思われる。

著者等は昨年都内での利用者調査に基づき利用者像の分析を行った。その結果は、図書館を良く利用するタイプ(10～30代の学生、主婦、事務職、専門職・技術職)の存在、勤務先の図書館と居住地の図書館の利用者層の違い等、杉並調査を裏付けるような結果が得られた。<sup>8)</sup>

本稿では、杉並調査の妥当性の検証を通じて、公共図書館利用行動の解明を試みた。すなわち、本稿は以下の2点をその目的としている。

1. 公共図書館利用者の利用行動を、その目的との関連において分析し、利用に2つの類型が存在するかどうかを検討する。
2. 1. で検討した類型と利用者像との対応を試みる。

## II. 調査方法

### A. 使用データ

分析に使用したデータは、すべて1980年6月に著者等が実施した利用者調査により得られたものである。調査方法の詳細はすでに前述の論文<sup>9)</sup>で述べているので、ここではその概要のみを記す。

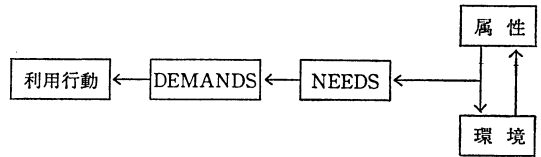
調査は東京都市部2館、都心部2館の計4館において、6月末の平日と日曜日(1館のみ土曜日)の2日間の全来館者(中学生以上)に対して実施した。総回収数は2,937票で、回収率はいずれの館でも90%を超えた。なお、今回は成人の利用行動の分析が目的であるから、分析には20才以上の利用者1,800票を使用した。

# 公共図書館利用者の利用行動

## B. 分析項目

利用者の館内での行動の背後には、常に“利用目的”という形で表明される顕在的な要求（demands）が存在する。顕在的な要求は、個人が生活上で直面するさまざまな必要（needs）から生れてくるものであり、従って利用者の行動を理解するためには、そのさまざまな属性や環境と、そこから生れてくるニーズとを知らなければなら

ない。以上を図示すると、第1図のようになる。



第1図 図書館利用のモデル

第1表 利用目的と入館時刻（平日のみ）

入館時刻	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
午前 9 時 台	12 11.8% 3.1%	34 33.3% 13.2%	8 7.8% 6.3%	13 12.7% 9.8%	2 2.0% 9.1%	8 7.8% 16.3%	25 24.5% 9.9%	102 8.3%
10 時 台	22 21.0% 5.6%	31 29.5% 12.0%	12 11.4% 9.5%	12 11.4% 9.1%	1 1.0% 4.5%	5 4.8% 10.2%	22 21.0% 8.7%	105 8.5%
11 時 台	29 27.9% 7.4%	21 20.2% 8.1%	8 7.7% 6.3%	16 15.4% 12.1%	2 1.9% 9.1%	3 2.9% 6.1%	25 24.0% 9.9%	104 8.4%
12 時 台	71 30.6% 18.1%	39 16.8% 15.1%	19 8.2% 15.1%	33 14.2% 25.0%	2 0.9% 9.1%	9 3.9% 18.4%	59 25.4% 23.4%	232 18.8%
午後 1 時 台	52 32.7% 13.2%	41 25.8% 15.9%	22 13.8% 17.5%	12 7.5% 9.1%	2 1.3% 9.1%	7 4.4% 14.3%	23 14.5% 9.1%	159 12.9%
2 時 台	40 28.2% 10.2%	31 21.8% 12.0%	22 15.5% 17.5%	15 10.6% 11.4%	5 3.5% 22.7%	2 1.4% 4.1%	27 19.0% 10.7%	142 11.5%
3 時 台	45 35.7% 11.5%	26 20.6% 10.1%	14 11.1% 11.1%	12 9.5% 9.1%	1 0.8% 4.5%	5 4.0% 10.2%	23 18.3% 9.1%	126 10.2%
4 時 台	54 45.0% 13.7%	14 11.7% 5.4%	12 10.0% 9.5%	8 6.7% 6.1%	2 1.7% 9.1%	5 4.2% 10.2%	25 20.8% 9.9%	120 9.7%
5 時 台	30 39.5% 7.6%	16 21.1% 6.2%	8 10.5% 6.3%	7 9.2% 5.3%	0 0.0% 0.0%	4 5.3% 8.2%	11 14.5% 4.4%	76 6.2%
6 時 台	24 52.2% 6.1%	4 8.7% 1.6%	0 0.0% 0.0%	3 6.5% 2.3%	3 6.5% 13.6%	1 2.2% 2.0%	11 23.9% 4.4%	46 3.7%
7 時 台	14 70.0% 3.6%	1 5.0% 0.4%	1 5.0% 0.8%	1 5.0% 0.8%	2 10.0% 9.1%	0 0.0% 0.0%	1 5.0% 0.4%	20 1.6%
合 計	393 31.9%	258 20.9%	126 10.2%	132 10.7%	22 1.8%	49 4.0%	252 20.5%	1232 100.0%

上段が実数、中段が行のパーセント、下段が列のパーセントを示している。合計では、上段が実数、下段が総計に対するパーセントを示している。

今回の分析では、使用するデータの制約から、第1図のモデルに従った完全な分析は不可能である。これは調査票の設計時に、(i)質問項目数を多くして回収率が低下することを避けたためと、(ii)過去の調査事例との比較が可能となるような項目の選択をしたことの結果である。

る。

(i) 利用行動を示す変数としては、入・退館時刻、在館時間、利用資料の形態・主題を採用した。

(ii) Demands は利用目的によって測定した。

(iii) Needs は調査しなかった。

第2表 利用目的と退館時刻（平日のみ）

退館時刻	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
午前 9 時 台	6 37.5% 1.5%	1 6.3% 0.4%	1 6.3% 0.8%	1 6.3% 0.8%	1 6.3% 4.5%	0 0.0% 0.0%	6 37.5% 2.4%	16 1.3%
10 時 台	17 32.7% 4.3%	6 11.5% 2.3%	5 9.6% 4.0%	9 17.3% 6.8%	1 1.9% 4.5%	1 1.9% 2.0%	13 25.0% 5.2%	52 4.2%
11 時 台	25 28.7% 6.4%	20 23.0% 7.8%	9 10.3% 7.1%	9 10.3% 6.8%	1 1.1% 4.5%	6 6.9% 12.2%	17 19.5% 6.7%	87 7.1%
12 時 台	71 38.0% 18.1%	22 11.8% 8.5%	10 5.3% 7.9%	27 14.4% 20.5%	2 1.1% 9.1%	8 4.3% 16.3%	47 25.1% 18.7%	187 15.2%
午後 1 時 台	43 29.1% 10.9%	25 16.9% 9.7%	21 14.2% 16.7%	19 12.8% 14.4%	2 1.4% 9.1%	7 4.7% 14.3%	31 20.9% 12.3%	148 12.0%
2 時 台	33 30.6% 8.4%	14 13.0% 5.4%	17 15.7% 13.5%	14 13.0% 10.6%	4 3.7% 18.2%	4 3.7% 8.2%	22 20.4% 8.7%	108 8.8%
3 時 台	54 34.4% 13.7%	36 22.9% 14.0%	17 10.8% 13.5%	17 10.8% 12.9%	3 1.9% 13.6%	3 1.9% 6.1%	27 17.2% 10.7%	157 12.7%
4 時 台	58 29.1% 14.8%	54 27.1% 20.9%	22 11.1% 17.5%	14 7.0% 10.6%	2 1.0% 9.1%	13 6.5% 26.5%	36 18.1% 14.3%	199 16.2%
5 時 台	28 20.0% 7.1%	51 36.4% 19.8%	17 12.1% 13.5%	11 7.9% 8.3%	1 0.7% 4.5%	2 1.4% 4.1%	30 21.4% 11.9%	140 11.4%
6 時 台	30 37.0% 7.6%	18 22.2% 7.0%	6 7.4% 4.8%	8 9.9% 6.1%	3 3.7% 13.6%	2 2.5% 4.1%	14 17.3% 5.6%	81 6.6%
7 時 台	27 50.9% 6.9%	10 18.9% 3.9%	1 1.9% 0.8%	3 5.7% 2.3%	1 1.9% 4.5%	2 3.8% 4.1%	9 17.0% 3.6%	53 4.3%
8 時 台	1 25.0% 0.3%	1 25.0% 0.4%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	1 25.0% 4.5%	1 25.0% 2.0%	0 0.0% 0.0%	4 0.3%
合 計	393 31.9%	258 20.9%	126 10.2%	132 10.7%	22 1.8%	49 4.0%	252 20.5%	1232 100.0%

上段が実数、中段が行のパーセント、下段が列のパーセントを示している。合計では、上段が実数、下段が総計に対するパーセントを示している。

公共図書館利用者の利用行動

第3表 利用目的と在館時間

在 館 時 間	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
1 時 間 以 内	567 48.8% 89.9%	103 8.9% 28.9%	104 9.0% 61.5%	100 8.6% 60.2%	28 2.4% 84.8%	38 3.3% 59.4%	222 19.1% 64.2%	1162 65.8%
1～2時間以内	43 17.3% 6.8%	72 28.9% 20.2%	29 11.6% 17.2%	40 16.1% 24.1%	5 2.0% 15.2%	11 4.4% 17.2%	49 19.7% 14.2%	249 14.1%
2～3時間以内	14 10.1% 2.2%	53 38.1% 14.8%	21 15.1% 12.4%	11 7.9% 6.6%	0 0.0% 0.0%	4 2.9% 6.3%	36 25.9% 10.4%	139 7.9%
3～4時間以内	3 3.7% 0.5%	52 63.4% 14.6%	4 4.9% 2.4%	2 2.4% 1.2%	0 0.0% 0.0%	5 6.1% 7.8%	16 19.5% 4.6%	82 4.6%
4～5時間以内	2 4.8% 0.3%	26 61.9% 7.3%	3 7.1% 1.8%	2 4.8% 1.2%	0 0.0% 0.0%	1 2.4% 1.6%	8 19.0% 2.3%	42 2.4%
5～6時間以内	2 5.0% 0.3%	24 60.0% 6.7%	1 2.5% 0.6%	4 10.0% 2.4%	0 0.0% 0.0%	2 5.0% 3.1%	7 17.5% 2.0%	40 2.3%
6 時 間 以 上	0 0.0% 0.0%	27 51.9% 7.6%	7 13.5% 4.1%	7 13.5% 4.2%	0 0.0% 0.0%	3 5.8% 4.7%	8 15.4% 2.3%	52 2.9%
合 計	631 35.7%	357 20.2%	169 9.6%	166 9.4%	33 1.9%	64 3.6%	346 19.6%	1766 100.0%

上段が実数，中段が行のパーセント，下段が列のパーセントを示している．合計では，上段が実数，下段が総計に対するパーセントを示している．

(iv) 属性および環境に関しては，性，年齢というデモグラフィック変数，職業，学歴，居住地，通勤・通学先という社会的な変数，および登録の有無，利用頻度，他館の利用という特定環境（図書館）とのインタラクションを示す変数を採用した。

### C. 分析方法

主に多重クロス集計によって変数間の関連を推定した。パス分析および種々の多変量解析手法も，今回のモデルでは適用が考え得るが，(i)類似の変数を用いた過去の分析例があまり良い結果を得ていない<sup>10)</sup> ことと，(ii)調査票の制約から，変数が網羅的でない，ということ考慮に入れて，今回は採用しなかった。ただし，念のために数量化第3類を用いて，利用行動の分類および

分類結果と各変数との関連は追跡している。

解析に際しては慶應義塾大学計算センターの SDA パッケージを使用した。

クロス集計は第1図のモデルに従って，利用行動別・目的別，目的別一属性別に行った。

### D. 作業仮説

第1図のモデルおよび杉並調査の結果に従い，次のような作業仮説を設定した。

(i) 利用は貸出と調査研究・読書に2大別される。

(ii) 貸出の利用者は主婦とサラリーマンが中心で，日常生活時間帯の中で利用され，1回の利用時間は短い。利用資料は家事・文学関係の図書が中心である。

第4表 利用目的と利用した資料の形態

資 料 形 態	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
図 書	336	94	79	31	6	10	102	658
	51.1%	14.3%	12.0%	4.7%	0.9%	1.5%	15.5%	39.1%
	55.4%	28.4%	48.8%	19.5%	19.4%	16.1%	30.6%	
雑 誌	30	29	12	41	12	10	14	148
	20.3%	19.6%	8.1%	27.7%	8.1%	6.8%	9.5%	8.8%
	5.0%	8.8%	7.4%	25.8%	38.7%	16.1%	4.2%	
新 聞	5	17	8	9	5	8	4	56
	8.9%	30.4%	14.3%	16.1%	8.9%	14.3%	7.1%	3.3%
	0.8%	5.1%	4.9%	5.7%	16.1%	12.9%	1.2%	
そ の 他	4	2	1	0	0	4	2	13
	30.8%	15.4%	7.7%	0.0%	0.0%	30.8%	15.4%	0.8%
	0.7%	0.6%	0.6%	0.0%	0.0%	6.5%	0.6%	
何も利用しない	6	74	8	9	2	16	1	116
	5.2%	63.8%	6.9%	7.8%	1.7%	13.8%	0.9%	6.9%
	1.0%	22.4%	4.9%	5.7%	6.5%	25.8%	0.3%	
複 数 回 答 (下記を除く)	17	8	4	3	0	1	23	56
	30.4%	14.3%	7.1%	5.4%	0.0%	1.8%	41.1%	3.3%
	2.8%	2.4%	2.5%	1.9%	0.0%	1.6%	6.9%	
雑 誌 と 新 聞	8	21	7	25	3	3	15	82
	9.8%	25.6%	8.5%	30.5%	3.7%	3.7%	18.3%	4.9%
	1.3%	6.3%	4.3%	15.7%	9.7%	4.8%	4.5%	
図 書 と 雑 誌	200	86	43	41	3	10	172	555
	36.0%	15.5%	7.7%	7.4%	0.5%	1.8%	31.0%	33.0%
図 書 と 新 聞	33.0%	26.0%	26.5%	25.8%	9.7%	16.1%	51.7%	
合 計	606	331	162	159	31	62	333	1684
	36.0%	19.7%	9.6%	9.4%	1.8%	3.7%	19.8%	100.0%

上段が実数，中段が行のパーセント，下段が列のパーセントを示している。合計では，上段が実数，下段が総計に対するパーセントを示している。

(iii) 調査研究-読書の利用者は学生・専門職・高齢者が主体であり，彼等は朝早くから生活時間帯にとらわれずに来館し，1回の利用時間は長い。利用資料は多種類に渡るが，人文・社会科学関係が多い。

(iv) 少数であるが，“席借り”も存在する。

### III. 調 査 結 果

#### A. 利用目的の区分

調査では，目的を次のように分け，あてはまるものをすべてあげるとともに，主要な目的を明示するよう求め

た。集計の際には，複数項目をあげている場合でも，主要目的をもっている場合には，その個所へ分類した。主要目的が示されていない場合には，複数回答を別項目として扱っている。〔〕内は，本稿で用いている略称である。

1. 本を借りる（返す）ため。〔貸出〕
2. 勤め先・学校の仕事・勉強（受験勉強も含む）。〔仕事勉強〕
3. それ以外の調べ物・研究。〔調査研究〕
4. 館内での読書。〔読書〕
5. 特に目的はない。〔無目的〕

公共図書館利用者の利用行動

第5表 利用目的と利用した資料の内容

資 料 内 容	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
研 究 的	77 19.4% 12.9%	126 31.7% 50.4%	74 18.6% 48.7%	37 9.3% 24.8%	3 0.8% 11.5%	11 2.8% 26.8%	69 17.4% 20.7%	397 25.6%
趣 味 的	259 51.3% 43.2%	51 10.1% 20.4%	30 5.9% 19.7%	64 12.7% 43.0%	16 3.2% 61.5%	19 3.8% 46.3%	66 13.1% 19.8%	505 32.6%
両 分 野	263 40.5% 43.9%	73 11.2% 29.2%	48 7.4% 31.6%	48 7.4% 32.2%	7 1.1% 26.9%	11 1.7% 26.8%	199 30.7% 59.6%	649 41.8%
合 計	599 38.6%	250 16.1%	152 9.8%	149 9.6%	26 1.7%	41 2.6%	334 21.5%	1551 100.0%

上段が実数，中段が行のパーセント，下段が列のパーセントを示している．合計では，上段が実数，下段が総計に対するパーセントを示している．

第6表 利用目的と性別

性 別	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
男 性	320 26.9% 51.4%	301 25.3% 84.8%	131 11.0% 79.9%	135 11.3% 81.8%	24 2.0% 80.0%	42 3.5% 65.6%	238 20.0% 68.8%	1191 68.2%
女 性	303 54.5% 48.6%	54 9.7% 15.2%	33 5.9% 20.1%	30 5.4% 18.2%	6 1.1% 20.0%	22 4.0% 34.4%	108 19.4% 31.2%	556 31.8%
合 計	623 35.7%	355 20.3%	164 9.4%	165 9.4%	30 1.7%	64 3.7%	346 19.8%	1747 100.0%

上段が実数，中段が行のパーセント，下段が列のパーセントを示している．合計では，上段が実数，下段が総計に対するパーセントを示している．

6. その他。〔その他〕

7. 複数の目的があり，主要目的が示されていない。

〔複数目的〕

B. 利用目的による利用行動の差違

1. 入館時刻，退館時刻（第1表，第2表）

入館時刻，退館時刻は，調査対象となった4図書館の開館・閉館時刻が異っているので，厳密な指標ではない。しかし，利用者の生活時間の側からみれば，入退館時刻は意味がある。ここでは平日の結果のみを示す。

貸出中心の利用者の比率が高まるのは，入館時刻では，午後1時から8時まで，退館時刻では，午前9時から午前12時までと，午後6時台，7時台である。これは，貸

出利用はほぼ開館時間全体にわたっていることと，在館時間が短いことを示している。

仕事勉強の場合は，入館時刻のピークは午前9時台と午後1時台であり，退館時刻のピークは，午前11時台と午後3時から8時までと，入館時刻帯と退館時刻帯が，明瞭に区分されている。朝早くから来館して，夕刻遅くに退館するような，在館時間の長い，つまり図書館利用が生活の中心であるような利用行動を持つ利用者層となっている。

調査研究の場合も，仕事勉強と同様の傾向があるが，入館時刻のピークと退館時刻のピークの時間帯とが重なり合っており，早い時刻に入館するが，夕刻までには，



多くが退館してしまう。

読書主体の利用は、入館時刻は、午前中の比率が高く、退館時刻は、午前10時から午後3時までにピークが

あり、午前中を中心として、日中に利用が集中している。調査研究のパターンに近い。

## 2. 在館時間(第3表)

第7表 利用目的と年令

年 令	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
20 才 代	238 30.9% 37.7%	226 29.3% 63.3%	54 7.0% 32.0%	71 9.2% 42.8%	13 1.7% 39.4%	19 2.5% 29.7%	150 19.5% 43.4%	771 43.7%
30 才 代	191 40.4% 30.3%	89 18.8% 24.9%	37 7.8% 21.9%	41 8.7% 24.7%	4 0.8% 12.1%	21 4.4% 32.8%	90 19.0% 26.0%	473 26.8%
40 才 代	122 45.4% 19.3%	24 8.9% 6.7%	32 11.9% 18.9%	22 8.2% 13.3%	9 3.3% 27.3%	10 3.7% 15.6%	50 18.6% 14.5%	269 15.2%
50 才 代	51 34.5% 8.1%	10 6.8% 2.8%	23 15.5% 13.6%	15 10.1% 9.0%	6 4.1% 18.2%	11 7.4% 17.2%	32 21.6% 9.2%	148 8.4%
60 才 以 上	29 27.6% 4.6%	8 7.6% 2.2%	23 21.9% 13.6%	17 16.2% 10.2%	1 1.0% 3.0%	3 2.9% 4.7%	24 22.9% 6.9%	105 5.9%
合 計	631 35.7%	357 20.2%	169 9.6%	166 9.4%	33 1.9%	64 3.6%	346 19.6%	1766 100.0%

上段が実数、中段が行のパーセント、下段が列のパーセントを示している。合計では、上段が実数、下段が総計に対するパーセントを示している。

第8表 利用目的と学歴

学 歴	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
小・中学校卒	21 53.8% 3.5%	1 2.6% 0.3%	4 10.3% 2.5%	4 10.3% 2.5%	4 10.3% 13.3%	3 7.7% 5.0%	2 5.1% 0.6%	39 2.3%
高校等卒	178 44.3% 29.7%	44 10.9% 12.5%	31 7.7% 19.5%	42 10.4% 26.2%	10 2.5% 33.3%	20 5.0% 33.3%	77 19.2% 23.1%	402 23.7%
大学等卒	401 32.0% 66.8%	306 24.4% 87.2%	124 9.9% 78.0%	114 9.1% 71.2%	16 1.3% 53.3%	37 3.0% 61.7%	254 20.3% 76.3%	1252 74.0%
合 計	600 35.4%	351 20.7%	159 9.4%	160 9.5%	30 1.8%	60 3.5%	333 19.7%	1693 100.0%

上段が実数、中段が行のパーセント、下段が列のパーセントを示している。合計では、上段が実数、下段が総計に対するパーセントを示している。

公共図書館利用者の利用行動

第9表 利用目的と仕事の内容・職業

仕事の内容	貸出	仕事勉強	調査研究	読書	無目的	その他	複数目的	合計
事務関係	123 43.0% 19.9%	49 17.1% 13.9%	10 3.5% 6.2%	35 12.2% 21.5%	1 0.3% 3.3%	10 3.5% 15.6%	58 20.3% 17.4%	286 16.6%
販売関係	26 21.1% 4.2%	35 28.5% 9.9%	20 16.3% 12.4%	17 13.8% 10.4%	2 1.6% 6.7%	4 3.3% 6.3%	19 15.4% 5.7%	123 7.1%
サービス関係	19 27.5% 3.1%	12 17.4% 3.4%	10 14.5% 6.2%	12 17.4% 7.4%	1 1.4% 3.3%	3 4.3% 4.7%	12 17.4% 3.6%	69 4.0%
技術者・専門職	104 38.0% 16.8%	53 19.3% 15.1%	37 13.5% 23.0%	24 8.8% 14.7%	3 1.1% 10.0%	7 2.6% 10.9%	46 16.8% 13.8%	274 15.9%
技能者・工員・作業員	27 39.7% 4.4%	7 10.3% 2.0%	9 13.2% 5.6%	8 11.8% 4.9%	6 8.8% 20.0%	1 1.5% 1.6%	10 14.7% 3.0%	68 3.9%
管理職	35 31.3% 5.7%	16 14.3% 4.5%	12 10.7% 7.5%	9 8.0% 5.5%	0 0.0% 0.0%	4 3.6% 6.3%	36 32.1% 10.8%	112 6.5%
自営・家族従業員	11 28.2% 1.8%	2 5.1% 0.6%	4 10.3% 2.5%	6 15.4% 3.7%	2 5.1% 6.7%	5 12.8% 7.8%	9 23.1% 2.7%	39 2.3%
その他	1 6.7% 0.2%	3 20.0% 0.9%	4 26.7% 2.5%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	1 6.7% 1.6%	6 40.0% 1.8%	15 0.9%
勤労学生	2 25.0% 0.3%	4 50.0% 1.1%	0 0.0% 0.0%	1 12.5% 0.6%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	1 12.5% 0.3%	8 0.5%
勤労又は学生の主婦	8 50.0% 1.3%	2 12.5% 0.6%	1 6.3% 0.6%	1 6.3% 0.6%	1 6.3% 3.3%	1 6.3% 1.6%	2 12.5% 0.6%	16 0.9%
主婦	151 66.5% 24.4%	3 1.3% 0.9%	14 6.2% 8.7%	7 3.1% 4.3%	2 0.9% 6.7%	17 7.5% 26.6%	33 14.5% 9.9%	227 13.2%
学生	79 24.0% 12.8%	122 37.1% 34.7%	16 4.9% 9.9%	21 6.4% 12.9%	8 2.4% 26.7%	7 2.1% 10.9%	76 23.1% 22.8%	329 19.1%
無職	32 20.5% 5.2%	44 28.2% 12.5%	24 15.4% 14.9%	22 14.1% 13.5%	4 2.6% 13.3%	4 2.6% 6.3%	26 16.7% 7.8%	156 9.1%
合計	618 35.9%	352 20.4%	161 9.3%	163 9.5%	30 1.7%	64 3.7%	334 19.4%	1722 100.0%

上段が実数，中段が行のパーセント，下段が列のパーセントを示している．合計では，上段が実数，下段が総計に対するパーセントを示している．

入・退館時刻によって在館時間を算出した。在館時間も各図書館の開館時間の相違から影響をうける。

貸出目的では、その約90%までが、入館して1時間以内に退館する。

これに対して、仕事勉強、調査研究、読書の在館時間はいずれも長く、特に仕事勉強を目的とする利用者の約14%は、5時間以上在館している。調査研究、読書の場合は、貸出よりも在館時間は長い、約90%は、3時間以内に退館している。

### 3. 利用資料の形態(第4表)

調査では、(1)図書、(2)雑誌、(3)新聞、(4)その他、(5)何も利用しない、の5項目の複数回答を求めた。集計にあたり、(6)雑誌と新聞、(7)図書と雑誌あるいは、図書と新聞、(8)その他の複数回答、の区分をつけ加えた。

貸出を目的とする利用者は、当然のことながら、図書を多く利用する。新聞の利用は、極めて少い。

仕事勉強を目的とする利用者は、雑誌、新聞を利用するか、あるいは、何も使わない。

調査研究主体の利用者は、図書または、新聞を用いる傾向がある。

読書を目的とする利用者の利用資料は、雑誌と新聞であって、図書は少い。

### 5. 利用資料の内容(第5表)

調査では、利用資料を、読書世論調査(毎日新聞社)の分類を加工した10区分に対し、複数回答を求めた。

集計に際しては、大きく次の3区分とした。

#### a. 研究的な内容をもつ資料を利用

哲学・心理・宗教、歴史・地理・風俗、社会科学、自然科学・工学、産業、百科事典・年鑑など

#### b. 趣味的、娯楽的内容をもつ資料を利用

芸術・趣味・スポーツ、家事、語学、文学

#### c. a.とb.の両方を利用

貸出を目的とする利用者は、趣味的、娯楽的な内容をもつ資料をよく利用し、両分野にまたがる資料の利用も高い。

仕事勉強、調査研究を目的とする利用者は、研究的な内容をもつ資料をよく利用している。

第10表 利用目的と居住地

居住地	貸出	仕事勉強	調査研究	読書	無目的	その他	複数目的	合計
500m以内	54	6	10	8	2	8	21	109
	49.5%	5.5%	9.2%	7.3%	1.8%	7.3%	19.3%	6.5%
	9.1%	1.7%	6.2%	5.1%	6.9%	13.1%	6.4%	
500m～1km	149	56	29	24	5	8	74	345
	43.2%	16.2%	8.4%	7.0%	1.4%	2.3%	21.4%	20.5%
	25.2%	16.0%	18.0%	15.3%	17.2%	13.1%	22.4%	
1km～1.5km	94	34	22	16	2	7	36	211
	44.5%	16.1%	10.4%	7.6%	0.9%	3.3%	17.1%	12.6%
	15.9%	9.7%	13.7%	10.2%	6.9%	11.5%	10.9%	
1.5km～市(区)内	133	63	25	27	5	12	52	317
	42.0%	19.9%	7.9%	8.5%	1.6%	3.8%	16.4%	18.9%
	22.5%	18.0%	15.5%	17.2%	17.2%	19.7%	15.8%	
市(区)外	161	191	75	82	15	26	147	697
	23.1%	27.4%	10.8%	11.8%	2.2%	3.7%	21.1%	41.5%
	27.2%	54.6%	46.6%	52.2%	51.7%	42.6%	44.5%	
合計	591	350	161	157	29	61	330	1679
	35.2%	20.8%	9.6%	9.4%	1.7%	3.6%	19.7%	100.0%

上段が実数、中段が行のパーセント、下段が列のパーセントを示している。合計では、上段が実数、下段が総計に対するパーセントを示している。

# 公共図書館利用者の利用行動

一方、読書主体の利用者は、趣味的・娯楽的な内容の資料を読んでいる。

## C. 利用者の属性・環境と利用目的

### 1. 性別(第6表)

女性利用者では、半数以上が貸出を中心とした利用であり、次いで仕事勉強である。調査研究、読書を目的とする利用者は少い。

一方、男性では、主たる利用目的として、貸出と仕事勉強とが拮抗しており、次いで、読書と調査研究も1割をこえている。

男性と女性の図書館利用には、明らかに相違があり、男性は、利用が多様化し、貸出と仕事勉強に対し、調査研究、読書が迫っている。一方、女性利用者は、貸出を主体とした利用目的をもっている。

### 2. 年齢(第7表)

調査では、年齢の記入を求めたが、集計は、10才ごとに区切り、60才以上は一括した。

20代では、仕事勉強の比率が高く、貸出、調査研究は低い。30才代では、調査研究の比率が低いほかは、特色

はみられない。40才代では、貸出、調査研究の比率が高く、仕事勉強は低い。50才代では、調査研究が多くなり、仕事勉強は少い。60才以上では、調査研究の比率がさらに高まり、読書も極めて多い。

貸出の比率が高いのは、40才台前後であり、読書を目的とした図書館利用は、60才以上が中心である。一方、仕事勉強の比率は、20才台をピークに減少していくが、調査研究的な図書館利用は、年齢が高まるにつれて多くなり、両者は、30才台から40才台において逆転する。

### 3. 学歴(第8表)

最終学歴を、(1)小・中学校、(2)高校(旧制中学)、(3)短大・高専・大学・大学院(旧制高校)の3段階で集計した。

有意差がある。貸出は、小・中学校卒、高校卒では比率が高い。一方、大学卒では、仕事勉強、調査研究の比率が高くなっている。なお、人数は少いが、小・中学校卒では、調査研究の割合が高くなっている。

### 4. 仕事・職業(第9表)

調査票では、勤労者、主婦、学生、無職に分け、勤労

第11表 利用目的と通勤通学先

通 勤 通 学 先	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
500m以内	14 18.4% 2.3%	27 35.5% 7.7%	4 5.3% 2.4%	9 11.8% 5.6%	2 2.6% 6.1%	7 9.2% 11.1%	13 17.1% 3.9%	76 4.4%
500 m～1 km	84 30.0% 13.5%	62 22.1% 17.8%	27 9.6% 16.1%	32 11.4% 19.8%	4 1.4% 12.1%	7 2.5% 11.1%	64 22.9% 19.0%	280 16.2%
1 km～1.5 km	56 34.4% 9.0%	28 17.2% 8.0%	16 9.8% 9.5%	21 12.9% 13.0%	2 1.2% 6.1%	2 1.2% 3.2%	38 23.3% 11.3%	163 9.4%
1.5km～市(区)内	242 44.8% 39.0%	74 13.7% 21.2%	53 9.8% 31.5%	34 6.3% 21.0%	15 2.8% 45.5%	25 4.6% 39.7%	97 18.0% 28.9%	540 31.2%
市 (区) 外	225 33.4% 36.2%	158 23.5% 45.3%	68 10.1% 40.5%	66 9.8% 40.7%	10 1.5% 30.3%	22 3.3% 34.9%	124 18.4% 36.9%	673 38.9%
合 計	621 35.9%	349 20.2%	168 9.7%	162 9.4%	33 1.9%	63 3.6%	336 19.4%	1732 100.0%

上段が実数、中段が行のパーセント、下段が列のパーセントを示している。合計では、上段が実数、下段が総計に対するパーセントを示している。

第12表 利用目的と貸出登録

貸 出 登 録	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
登 録	626 52.8% 100.0%	122 10.3% 34.7%	81 6.8% 48.8%	41 3.5% 25.0%	11 0.9% 33.3%	25 2.1% 39.7%	280 23.6% 80.9%	1186 67.8%
未 登 録	0 0.0% 0.0%	230 40.8% 65.3%	85 15.1% 51.2%	123 21.8% 75.0%	22 3.9% 66.7%	38 6.7% 60.3%	66 11.7% 19.1%	564 32.2%
合 計	626 35.8%	352 20.1%	166 9.5%	164 9.4%	33 1.9%	63 3.6%	346 19.8%	1750 100.0%

上段が実数，中段が行のパーセント，下段が列のパーセントを示している．合計では，上段が実数，下段が総計に対するパーセントを示している．

第13表 利用目的と利用頻度

利 用 頻 度	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
月 1 回 以 上	575 39.9% 91.4%	262 18.2% 73.6%	118 8.2% 70.2%	127 8.8% 76.5%	17 1.2% 51.5%	40 2.8% 62.5%	302 21.0% 87.5%	1441 81.8%
半 年 1 回 以 上	40 26.3% 6.4%	37 24.3% 10.4%	20 13.2% 11.9%	11 7.2% 6.6%	5 3.3% 15.2%	5 3.3% 7.8%	34 22.4% 9.9%	152 8.6%
めったに利用しない	14 8.3% 2.2%	57 33.9% 16.0%	30 17.9% 17.9%	28 16.7% 16.9%	11 6.5% 33.3%	19 11.3% 29.7%	9 5.4% 2.6%	168 9.5%
合 計	629 35.7%	356 20.2%	168 9.5%	166 9.4%	33 1.9%	64 3.6%	345 19.6%	1761 100.0%

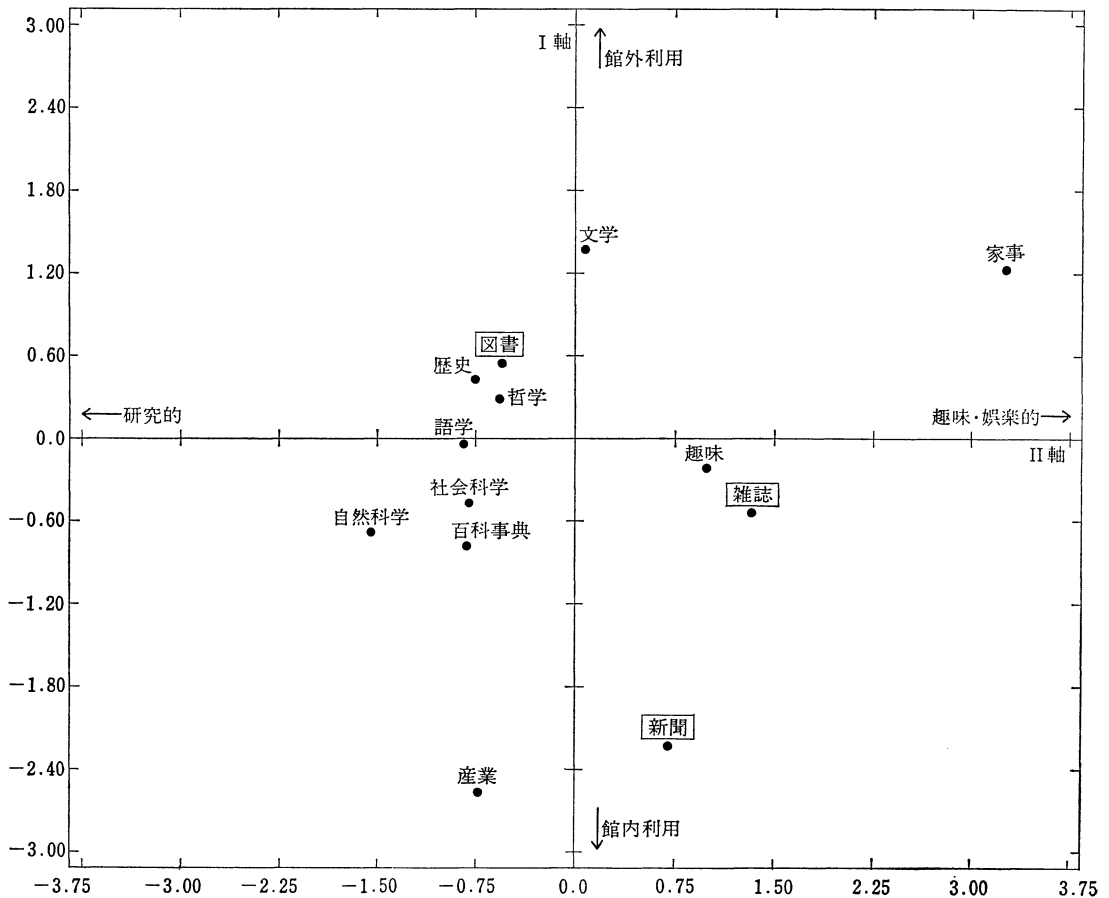
上段が実数，中段が行のパーセント，下段が列のパーセントを示している．合計では，上段が実数，下段が総計に対するパーセントを示している．

第14表 利用目的と他の図書館の利用経験

利 用 経 験	貸 出	仕事勉強	調査研究	読 書	無 目 的	そ の 他	複数目的	合 計
他 の 図 書 館 の 利 用 経 験 あ り	351 29.5% 55.7%	290 24.3% 81.5%	122 10.2% 72.2%	121 10.2% 73.8%	17 1.4% 53.1%	31 2.6% 48.4%	259 21.7% 76.0%	1191 67.8%
利 用 経 験 な し	279 49.4% 44.3%	66 11.7% 18.5%	47 8.3% 27.8%	43 7.6% 26.2%	15 2.7% 46.9%	33 5.8% 51.6%	82 14.5% 24.0%	565 32.2%
合 計	630 35.9%	356 20.3%	169 9.6%	164 9.3%	32 1.8%	64 3.6%	341 19.4%	1756 100.0%

上段が実数，中段が行のパーセント，下段が列のパーセントを示している．合計では，上段が実数，下段が総計に対するパーセントを示している．

# 公共図書館利用者の利用行動



第2図 数量化第3類の結果

者には、産業と仕事の内容をたずねている。勤労者を仕事の内容で、(1)事務関係、(2)販売関係、(3)サービス関係、(4)技術者・専門職、(5)技能者・工員・作業員、(6)管理職、(7)自営・家族従業員、(8)その他に分け、(9)勤労学生、(10)勤労主婦、学生の主婦、(11)主婦、(12)学生、(13)無職と分類して集計した。

貸出の比率が高いのは、主婦であり、次いで、事務関係、技能者、技術者となっている。仕事勉強の比率が高いのは、学生であり、その他に、販売関係の勤労者と無職とがあげられる。事務職を除くすべての勤労者、および無職では、調査研究のための利用が多い。読書のための利用が多いのは、技術者、管理職以外の勤労者と無職である。

主婦は、貸出中心、学生は、勉強が中心であるが、勤労者は、調査研究と読書が主体となっている。勤労者の

仕事の内容によっても利用に差違がある。

## 5. 居住地、通勤・通学先(第10表、第11表)

居住地、通勤・通学先は、500 m メッシュによって調査したが、集計は、図書館から、(1)500 m 以内、(2)500m~1 km、(3)1 km~1.5 km以内で市(区)内、(4)1.5 km 以外で市(区)内と分けさらに(5)市(区)外と区分して行った。

市(区)内に居住地がある場合には、貸出を目的とした利用が、高い比率を示している。居住地が、市(区)外である利用者は、仕事勉強、調査研究、読書の比率が高くなっている。

通勤・通学先が市(区)外である利用者は、居住地の場合と同様、仕事勉強、調査研究、読書の利用が高い。しかし、図書館と通勤・通学先が近い(1 km以内)利用者は、貸出よりも、仕事勉強と読書中心の利用をしてい

る。貸出が中心であるのは、図書館と通勤・通学先の距離が1 km 以上で市(区)内の利用者である。

なお、居住地と通勤・通学先の両方とも市(区)外である利用者、すなわち、図書館の利用のために、当該市(区)へ来ているとみられる利用者は、179 名あり、その利用目的は、1. 複数目的(51名)、2. 仕事勉強(50名)、3. 読書(21名)、4. 調査研究、貸出(各20名)となっている。

#### 6. 貸出登録(第12表)

貸出登録を行っている利用者のほとんどは、貸出中心の利用をしている。一方、貸出登録をしていない利用者は、全体の約 1/3 を占めており、仕事勉強、読書、調査研究の比率が高くなっている。

#### 7. 利用頻度(第13表)

利用頻度は、(1)月に1回以上、(2)半年に1回以上、(3)めったに利用しないの3区分で調査した。

上記の(1)にあたる図書館をよく利用する利用者は、貸出中心であるが、(2)と(3)にあたる利用者は、仕事勉強、調査研究が、中心となっている。特に、図書館利用がまれであるほど、仕事勉強、調査研究の比率は高まっている。

#### 8. 他の図書館の利用経験(第14表)

他館の利用経験のある利用者は、仕事勉強、調査研究、読書の比率が高い。一方、他館の利用経験のない利用者は、貸出が主体となっている。

### D. 利用行動と利用者の属性・環境

利用行動別に、属性・環境とのクロス集計結果を示すが、各図書館の開・閉館時刻の影響の大きな、入・退館時刻は除く。また有意差のみられるもののみをあげる。

#### 1. 在館時間

在館時間の長いのは、男性、貸出登録をしていない利用者、他館の利用経験のある利用者である。職業では、在館時間の長い順に、無職、販売関係、学生、管理職、技術者・専門職、事務関係、主婦となる。また居住地が市(区)外である利用者も在館時間は長い。

#### 2. 利用資料の形態

男性よりも女性の方が、図書への依存度が強い。また女性の特色として、余り新聞を読まないことがあげられる。

職業では、図書を主として利用するのは、管理職、主婦、事務関係であり、雑誌は、販売関係と主婦に多く利用されている。無職では、新聞の利用者、何も利用しない利用者が、他に比較して多くなっている。

年令では、20才代では、何も利用しない利用者の比率

が高く、30才代は、雑誌の利用が目立つ。40才代以上は、多様な利用をしている。

学歴の低い利用者は、比較的、図書のみ、雑誌のみ、新聞のみといった利用をする傾向がみられる。

居住地の近い利用者は、図書と雑誌あるいは図書と新聞という利用が多く、市(区)外の利用者は、何も利用しない場合が多い。

貸出登録者は、図書の利用が多く、登録をしていない利用者の中では、何も利用しないものが多い。

利用頻度の低い利用者は、雑誌、新聞の利用が比較的多い。

他館の利用経験のない利用者は、図書のみの利用に集中している。

### 3. 利用資料の内容

男性は、均等に利用するが、女性は、趣味・娯楽が主体である。

年令では、各年代とも趣味・娯楽と研究的資料の両方を利用しているが、30才代と40才代は、趣味・娯楽が、50才代と60才代では、研究がそれぞれ多くなっている。

職業では、販売関係は研究が多く、主婦は趣味・娯楽に集中している。その他は、両方とも利用している。

学歴の低い利用者は、趣味・娯楽にかたよっており、学歴が高まるにつれ、両方とも利用するケースが増加する。

居住地では、図書館から近いほど趣味・娯楽が主体であり、遠いほど、研究がふえる。

貸出登録者は、両方とも利用し、登録していない利用者は、やや研究にかたよる。

利用頻度が高い利用者は、両方とも利用し、あまり利用しない利用者は研究と趣味・娯楽の双方に分かれる。

他の図書館の利用経験がある場合は、両方とも利用し、無い場合は、趣味・娯楽にかたよる傾向がある。

### E. 数量化第3類による利用行動の分析

利用行動を示す指標の中で、利用資料の形態と内容(主題)を分析対象とした。これらは、名義尺度であり、外的基準を持たないので、多変量解析のひとつの手法である数量化第3類を使用した。

対象としたのは、利用資料の形態として、図書、雑誌、新聞、内容としては、調査に用いた区分である。(Ⅲ B.5参照)

結果として第2図が作成された。1軸の固有値は0.309、寄与率13.4%、2軸の固有値は、0.273、寄与率11.8%である。

第15表 利用目的の得点

	サンプル数	1 軸	2 軸
貸 出	631	0.699	0.057
仕 事 勉 強	357	-0.456	-0.187
調 査 研 究	169	-0.245	-0.364
読 書	166	-0.509	0.579
無 目 的	33	-0.528	0.846
そ の 他	64	-0.439	0.484
複 数 目 的	346	-0.012	-0.118

1 軸は、館外利用—館内利用を示し、2 軸は、趣味・娯楽—研究的という側面を表わしている。また、2 軸は、Ⅲ. B.5 で行った利用資料の内容の分類の有効性を追認している。

次に、1 軸、2 軸に対して利用目的の得点を算出したのが第15表である。

利用目的が貸出の場合は、当然のことながら、館外利用が中心であるが、利用資料の内容は、多少、趣味・娯楽にかたよっている。

仕事勉強と調査研究では、館内利用が中心であり、研究的な内容の資料を多く利用している。

読書を目的とする利用者は、当然、館内利用が主体であり、趣味・娯楽的な資料を読んでいる。

#### IV. 考 察

ここでは、Ⅲ章で述べた調査結果から、作業仮説を検討する。

利用行動が、貸出とそれ以外の利用目的とで大きく異なるのは、明らかである。

貸出を主要な目的とする利用者は、全利用者の約36%を占めている。利用目的の中では第1位ではあるが、たとえば、複数回答中の“貸出”を含めたとしても、ようやく全利用者の半分に達するにすぎない。

貸出の利用者の主体は、主婦、事務関係、技術者・専門職であり、いずれも、図書館の利用自体が多い。しかし、主婦の占める比率は、約25%であって、主婦よりもサラリーマン全体の貸出利用の方が多い。

貸出の利用時間は、開館時間全体にわたっている。これは、主婦は、ほぼ日中に入館し、ほとんどが、午後5時台に退館するが、午後5時台以後に、事務関係、技術

者・専門職のサラリーマンが、比較的多く入館するためである。

貸出目的の来館者の在館時間は短い。その約90%は、入館後、1時間以内に退館している。

貸出される資料としては、趣味・娯楽的な内容を持つ図書が、多少多い。数量化第3類の分析結果からは、家事、文学、歴史、哲学を内容とする図書が、主として館外に貸出されることが明らかになっている。

さて、貸出以外の利用であるが、まず、“席借り”が分離できる。第4表で、何も利用せず、仕事勉強を目的とする74名がこれにあたるであろう。これらの利用者の多くは、20才代で無職であり、おそらく、国家試験等の受験者と大学受験浪人等が多数を占めると予想される。しかし、全利用者に占める割合は、約4%であって、極めて少数と言える。

最後のグループは、“席借り”を除く仕事勉強、調査研究、読書を目的とする利用者層である。数量化第3類の結果からは、このグループは、仕事勉強—調査研究と読書とに分けられる。

読書を目的とする利用者は、利用者全体の1割近くを占めており、男性が主体であり、年齢が高まるにつれて比率が高まる。低学歴の中で読書の比率が高い。職業では、サービス関係、自営・家族従業員、無職、販売関係等に多く、貸出登録をしておらず、自宅は市(区)外であるが、勤務先は、比較的近い。

読書が主体の利用者は、午前中を中心として利用し、昼すぎには退館し、在館時間は、貸出に次いで短い。

この利用者層を特徴づけているのは、利用資料が雑誌と新聞にかたよっており、しかも、内容が、趣味・娯楽的であることである。

読書を目的とする利用者像は、おそらく、勤務先近くの図書館へ雑誌、新聞を読みに行くサラリーマンと、退職した高齢者と予想される。

仕事勉強—調査研究の利用者は、全体の3割近くを占めている。男性が主体で、低い年齢では、仕事勉強が多く、高齢になると調査研究の比率が増加する。高学歴者が多く、学生、無職、技術者・専門職、事務関係が多数を占めている。登録をしていない利用者が多少多く、大多数が、他の図書館の利用経験を持っている。

利用行動としては、入館時刻、退館時刻が広い時間帯にわたっており、在館時間の長いこと、主として図書を利用すること、研究的な内容の資料を利用すること等の特色がある。利用時間帯と在館時間からみて、この利用



者層の中には、図書館の利用が、生活の中で重要な位置を占めている人びとが存在すると考えられる。

## V. おわりに

公共図書館の調査データを、設定した図書館利用モデルにそって、多重クロス集計と多変量解析を用いて分析し、利用行動を明らかにした。

利用行動の2類型を示すことを意図していたが、館外利用、すなわち貸出利用と、館内利用に大別したのち、後者から、“席借り”と読書利用を分離し、仕事勉強一調査研究の利用行動とその属性、環境をより明確にすることができた。

調査対象とした東京都の4公共図書館の利用、利用行動は、貸出と仕事勉強一調査研究に関わる利用、利用行動に大別される。仕事勉強一調査研究の利用が、利用の大きな部分を占めていることは、公共図書館像に影響を与えることになろう。

本調査ではNeedsを調査していないために、Demandsと属性、環境との関連は、推定したにとどまっている。Demandsを利用目的に対応させ、利用目的の設定が不十分であった点は、今後の検討課題である。

さらに分析を深めるためには、より密度の濃い調査を必要としており、また、利用者のライフ・スタイル等の側面からの調査も必要である。

- 1) Berelson, Bernard. *The library's public*. New York, Columbia Univ. Pr., 1949, p. 51-83.
- 2) Bundy, Mary Lee. *Metropolitan public library users*. College Park, Md., Univ. of Maryland, 1968, p. 46-51.
- 3) Knight, Douglas M., and Nourse, E. Shepley, ed. *Libraries at large*. New York, Bowker, 1969, p. 76-7. また, Mendelsohn, Harold, and Wingerd, Karen. *The use of public libraries and the conditions that promote their use*. New York, Academy for Educational Development, 1967, p. II-14-II-15. (ED 022489) 参照.
- 4) Newhouse, Joseph P., and Alexander, Arthur J. *An economic analysis of public library services*. Lexington, Mass., Lexington Books, 1972, p. 18-48, 57-64.
- 5) Gallup Org. *Book reading and library usage*. Princeton, N. J., Gallup Org., 1978, p. 27.
- 6) Gallup Org. *The use of and attitudes toward libraries in New Jersey*. vol. 1. Trenton, N. J., New Jersey State Library, 1976, p. 26-7, 82-98.
- 7) 図書館問題研究会東京支部. 杉並区立図書館登録者についての調査報告書. 東京, 同支部, 1974, p.20-4.
- 8) 田村俊作, 上田修一. “公共図書館の利用者像,” *Library and information science*, no. 18, 1980, p. 123-40.
- 9) *Ibid.*, p. 125.
- 10) 最も新しいD'Elia, George. “The development and testing of a conceptual model of public library user behavior,” *Library quarterly*, vol. 50, 1980, p. 410-30. でも, 重回帰分析の結果は全変量の40%前後を説明する程度である.